

大阪市立大学生活科学部紀要・第42巻（1994）

人物画テストにおける男性像と女性像の研究

—性度の観点から—

原田美香・松島恭子

A study of a man figure and a woman figure

on the human figure drawings test

—from the masculinity-femininity point of view—

Mika Harada and Kyoko Matsushima

問 題

1. はじめに

「性同一性」に関する研究は、生物学、文化人類学、社会学など多方面に及んでいる。その中で、心理学においては、性同一性のどの部分に重点をおいているのであろうか。

山本（1984）は、心理学と社会学とを対比させて、「心理学では、“男らしさ” “女らしさ” など人格特性として記述されることが多いのに対して、社会学では、“男は外で働き、女は家をまもる” というような性別役割分業観が内面化されたものを意味することが多い。」と述べている。このように、心理学における性同一性を扱う時には、性同一性を自己の中に取り入れる人間の側に重点が置かれることになる。

臨床心理学的な観点から、人間が性同一性をどのように取り入れるか、という問題にかかわると思われる精神病理の一つに、近年増加している摂食異常（拒食症、過食症）の病理がある。この疾病にはいくつかの説が論じられているが、山口（1992）が挙げている説で、この病理に女性が多いことから、女性としての成熟拒否、女性化の拒否という説がある。

さらに、町沢（1990）は、摂食異常に陥る女性の心理的メカニズムを大きく2つに分けて、それを現代女性の2つの心理的な構えと照らして、「現代では女性は一方で男性に対抗しようとし、そのため中性化ないし、男性化傾向を見せる。他方自分が男性にとって魅力的な対象であろうとして露骨に女性性を発揮しようとする。」と述べている。

現代の女性がみな、この構えを持っているかどうかはわからない。しかし、どちらかと言えば男性優位な社会において、女性が、男性に負けじと男性に期待される役割を取り入れたり、男性にアピールするために女性に期待される役割を過度に身につけようとすることは、臨床的な事例から十分考えられることである。

一方、それは何も女性に限ったことではなく、男性においても性同一性の葛藤は同じではないだろうか。男性は男性で、例えば、社会からの期待（家族を養うなど）に答えねばならない、といった束縛感のようなものがあるのではないかと推察される。それだけ男性も女性も、性同一性に関して揺れ動いているのではないかと思われる。

筆者は、以上のように、現代の男女が自分自身の男らしさ、あるいは女らしさをどのように受け入れ位置づけ

ているのかを探ることを本研究で試みる。

人格特性として測る心理検査の上で、このような男らしさ、あるいは女らしさをどのように受け入れるかという性同一性を知るためには、主に質問紙法による検査と、ロールシャッハ・テストに代表される投影法による検査の2種類がある。どちらの心理検査も、実際に心理療法の中でクライアントの心理状態を知るために、また治療を促進させるものとして使われている。そのような検査の中で、投影法としての検査に描画テストがある。その中にさらに、人物画テストという描画テストがある。その人物画テストに基いて、空井(1986)は4つの臨床事例を挙げた上で、「男性・女性という問題は人物に描かせるという形でいくと(もし描いてくれれば)かなりはっきりするといえる」と述べている。

以上のような経緯で、筆者は人物画テストに関心を寄せることとなった。

2. 人物画テストについて

深田(1983)によれば、人物画テストは、児童の発達に伴う描画の発達が研究されてきた中で、Goodenough(1926)が人物画による知能測定の方法を示したことに始まる。Goodenoughによる人物画テストは、一人の人物を描かせるもので、DAM(Draw-a-Man Test)と呼ばれ、日本においても標準化され、世界的にDAMは広く用いられ研究された。

その次に、Machover(1949)によって、男女一对の二人の人物画を描かせるDAP(Draw-a-Person Test)が考案された。Machoverは人物画を性格テストと位置づけ、世界的に多くの研究を生み出した。

日本のDAPにおける研究は、最近の研究では、日比(1994)の研究が挙げられる。1~12才までの児童の男女524人を対象に、69個の描写項目について、発達的な推移や、知的な発達における分析を行なっている。また、多田(1990,1991,1993)は、大学生・専門学校生を対象とした一連の研究を行なっている。多田は、青年期における人物画描画法の研究として、男女178人に対し、SDS(Self-rating Depression Scale)を用いて、D

APの179の指標と比較し、DAPにおける抑うつ傾向を表す指標を調べている。次に、男性364人に対し、YGテストの3尺度、Co(協調性)、Ag(攻撃性)、S(社会的外向性)を用いてDAPにおける腕の位置との関係を調べている。さらに、男女129人に対し、向性テストを用いて、向性指数の高い群(外向性群)と低い群(内向性群)を選び出し、両群のDAPを180の指標について比較し、人物画における外向性、内向性の指標を検討している。

一方、単独のテストとしてではないが、人物画がテストの一部に含まれて扱われることも多い。その代表的なものに、Buck(1948)によって考案された家屋、樹木、人物を描かせるHTP法がある。さらにHammer(1958)は、BuckとMachoverの考えを合わせて、人物画を男女2枚描かせるHTPP法を考案した。このようなHTPP法は、高橋(1986)によれば、Meyerら(1955)、Wolk(1969)も行なっており、日本では高橋がHTPP法の研究を行なっている。

しかし、人物画テストにおける細部にわたる指標の検討や内容分析は研究されているが、人物画テストの特徴と言える男性像と女性像を比べる研究は、臨床事例を除くと日本での研究は少ないのではなかろうか。そこで本研究では、性同一性を確立しつつある時期にある大学生を対象として、男女別に男性像と女性像の違いを検討する。

3. 心理的性度と性度検査

ところで、BuckとMachoverの考えを合わせてHTPP法を考案したHammerは、人物画は心理・社会的水準という表面的なところで被験者の適応度が投影される、と述べている。このようなある程度表面的なレベルで性同一性、あるいは心理的性度を考える質問紙として、従来、性度検査が用いられている。

性度検査は、心理的男性性、女性性をどのような次元でとらえるかといった実証的な研究、すなわち尺度作成上で論じられてきた。

アメリカにおいては、1970年以前、男性性・女性性の

概念は一次元上のものである、という前提において測定尺度が作成された。その代表的なものは、市川(1992)によると、次の4つが挙げられる。

- ① TermanとMiles(1936)の態度興味分析検査(Attitude-Interest Analysis)。
- ② Guilford(1936)のGAMIN因子性格検査(Personality Inventory for Factor GAMIN)のM尺度。
- ③ MMP IのMf尺度(1943)。
- ④ Gough(1964)のカリフォルニア人格検査(California Psychological Inventory, CPI)のFe尺度。

これら従来の検査では、男性性が高ければ女性性が低く、女性性が高ければ男性性が低いと見なされていた。

しかし、1970年代に入り、そのような男性性・女性性の一次元把握の再検討が行われ、新たに二次元で把握しようとする尺度が作成された。その最初のもので、後の尺度作成に大きな影響を与えたのは、Bem(1974)によって作成されたBSRI(Bem Sex Role Inventory)である(井上, 1987)。BSRIは、男性性尺度、女性性尺度、中性尺度各20項目、計60項目で構成されている。

その他の二次元尺度には以下のようなものがある。(市川, 1992)。

- ① Spence、HelmreichとStopp(1975)のPAQ(The Personal Attributes Questionnaire)。
- ② PAQに否定的特性を示す項目を加えたEPAQ(Extended Personal Attributes Questionnaire)。
- ③ Heilbrun(1976)がACL(Adjective Check List)から作成したACLM-F尺度。
- ④ Berzins、WellingとWelter(1978)のPRF両性性尺度(Personality Research From ANDORO Scale)。

日本においても、心理的性度の二次元把握は、稲浦・柿坂(1980)が尺度作成を試みるなどして、二次元尺度が定着している。

その中で、本研究ではBemによって作成されたBSRIの日本版を用いて、心理的性度を男性的・両性的・無性的・女性的の4群に分け、男女別に分けた場合とどのような違いが人物画テストに見られるのかを検討する。

目 的

本研究では、性同一性を確立しつつある時期にある大学生を対象として、男女別に人物画テストの男性像と女性像の違いを検討し、さらに、性度検査によって男性的・両性的・無性的・女性的の4群に分けた心理的性度別と、男女別に分けた場合とどのような違いが見られるのかを検討することを目的とする。

方 法

1. 対 象

大学生 146名(男49名、女97名)、年齢18~22才、平均年齢19.3才。

2. 調査時期

1993年11月~12月

3. 手続き

授業時間中に集団形式で、人物画テスト、日本版BSRIの順に実施した。手続きは以下の通りである。

I. 人物画テスト

高橋・高橋(1991)の施行法を参考にして行なった。A4の白紙を2枚縦向きに渡し、①絵を描くこと、②絵の上手・下手を調べるのではないが、丁寧に描くこと、③漫画や抽象的な絵は描かないこと、④鉛筆で描き、消しゴム使用可、の注意を伝えた。その後で、「では人を一人描いて下さい。顔だけではなく全身を描いて下さい。」と教示する。時間は15分で、10分経過したら、残り時間を伝える。描いた人物の性別を記入してもらい、次に、別の紙に先に描いた人物と反対の性の人物を描いてもらった。同じ注意を伝え、時間も同じ15分であった。

II. 日本版BSRI

安達・上地・浅川(1985)らが作成した日本版BSRIを使用した。形容詞60項目(男性性項目、女性性項目、中性項目各々20項目)について、「自分にどのくらいあてはまるか」と教示し、7件法による評定を求めた。なお、日本版BSRIの質問紙については、表1に示す。

表1 日本版BSRI質問紙

次の1～60の項目について、自分にどのくらいあてはまるか、あてはまると思われる数字に○印をつけてください。数字のあらわす意味はだいたい以下のようです。

- | | | |
|--------------|--------------|-------------|
| 1—非常にあてはまらない | 2—かなりあてはまらない | 3—ややあてはまらない |
| 4—どちらともいえない | 5—ややあてはまる | 6—かなりあてはまる |
| 7—非常にあてはまる | | |

1 自立した	1	2	3	4	5	6	7	31 決断力のある	1	2	3	4	5	6	7
2 従順な	1	2	3	4	5	6	7	32 思いやりのある	1	2	3	4	5	6	7
3 おおらかな	1	2	3	4	5	6	7	33 誠実な	1	2	3	4	5	6	7
4 信念のある	1	2	3	4	5	6	7	34 勇敢な	1	2	3	4	5	6	7
5 明るい	1	2	3	4	5	6	7	35 人に尽くす	1	2	3	4	5	6	7
6 ふまじめな	1	2	3	4	5	6	7	36 画一的な	1	2	3	4	5	6	7
7 独立心のある	1	2	3	4	5	6	7	37 意志の強い	1	2	3	4	5	6	7
8 慎み深い	1	2	3	4	5	6	7	38 しとやかな	1	2	3	4	5	6	7
9 快活な	1	2	3	4	5	6	7	39 理解を示す	1	2	3	4	5	6	7
10 たくましい	1	2	3	4	5	6	7	40 男らしい	1	2	3	4	5	6	7
11 母性のある	1	2	3	4	5	6	7	41 あたたかい	1	2	3	4	5	6	7
12 不道徳な	1	2	3	4	5	6	7	42 つまらない	1	2	3	4	5	6	7
13 自己主張のできる	1	2	3	4	5	6	7	43 明確な態度のとれる	1	2	3	4	5	6	7
14 繊細な	1	2	3	4	5	6	7	44 やさしい	1	2	3	4	5	6	7
15 地道な	1	2	3	4	5	6	7	45 人情味のある	1	2	3	4	5	6	7
16 精神的に強い	1	2	3	4	5	6	7	46 積極的な	1	2	3	4	5	6	7
17 謙虚な	1	2	3	4	5	6	7	47 素直な	1	2	3	4	5	6	7
18 心のせまい	1	2	3	4	5	6	7	48 陰うつな	1	2	3	4	5	6	7
19 力強い	1	2	3	4	5	6	7	49 統率力のある	1	2	3	4	5	6	7
20 女らしい	1	2	3	4	5	6	7	50 ちゃめっけのある	1	2	3	4	5	6	7
21 誰に対しても平等に接することのできる	1	2	3	4	5	6	7	51 社会性のある	1	2	3	4	5	6	7
22 判断力のある	1	2	3	4	5	6	7	52 行動力のある	1	2	3	4	5	6	7
23 愛きょうのある	1	2	3	4	5	6	7	53 純粹な	1	2	3	4	5	6	7
24 協調性のない	1	2	3	4	5	6	7	54 怠慢な	1	2	3	4	5	6	7
25 指導力のある	1	2	3	4	5	6	7	55 頼りがいのある	1	2	3	4	5	6	7
26 人に気を使う	1	2	3	4	5	6	7	56 子どもをかわいがる	1	2	3	4	5	6	7
27 正直な	1	2	3	4	5	6	7	57 ユーモアのある	1	2	3	4	5	6	7
28 冒険心のある	1	2	3	4	5	6	7	58 やる気のある	1	2	3	4	5	6	7
29 もの静かな	1	2	3	4	5	6	7	59 親切的な	1	2	3	4	5	6	7
30 軽率な	1	2	3	4	5	6	7	60 おろかな	1	2	3	4	5	6	7

4. 結果の整理

日本版BSRIのデータを基に、因子分析を行なった。因子分析にはSMC法を用い、バリマックス回転を行なった。因子数は固有値を参考にして、3因子・4因子・5

因子の分析を行ない、因子の内容と照らし合わせて、4因子の結果を選択した。因子分析の結果は、表2に示す通りである。

表2 因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
自立した	0.50	0.15	-0.14	0.33	0.40
信念のある	0.69	0.08	-0.06	0.03	0.49
独立心のある	0.54	0.05	-0.02	0.18	0.33
自己主張できる	0.64	-0.06	-0.24	-0.04	0.47
判断力のある	0.71	0.08	-0.04	0.26	0.57
指導力のある	0.50	0.25	-0.26	0.09	0.39
決断力のある	0.70	-0.01	-0.03	0.04	0.49
勇敢な	0.68	0.19	-0.22	0.04	0.54
意志の強い	0.70	0.02	-0.06	0.23	0.54
明確な態度のとれる	0.71	-0.03	-0.01	0.19	0.54
積極的な	0.60	0.15	-0.38	0.05	0.53
統率力のある	0.51	0.19	-0.26	0.18	0.39
行動力のある	0.71	0.26	-0.23	-0.01	0.62
頼りがいのある	0.52	0.20	-0.27	0.46	0.60
慎重な	0.02	0.62	0.31	0.05	0.48
母性のある	-0.07	0.57	-0.39	0.05	0.48
繊細な	0.04	0.61	0.08	0.00	0.38
謙虚な	0.07	0.60	0.24	0.16	0.45
女らしい	-0.13	0.57	-0.05	-0.05	0.35
人に気を使う	-0.03	0.57	-0.05	0.06	0.33
思いやりのある	0.17	0.60	-0.21	0.31	0.53
誠実な	0.27	0.51	-0.15	0.28	0.43
人に尽くす	0.07	0.66	-0.08	0.16	0.48
しとやかな	-0.14	0.71	0.22	0.09	0.58
あたたかい	0.14	0.56	-0.36	0.21	0.51
やさしい	0.07	0.67	-0.24	0.26	0.57
人情味のある	0.18	0.64	-0.23	0.11	0.50
素直な	0.12	0.54	-0.23	0.24	0.42
純粹な	0.26	0.59	-0.17	0.02	0.45
親切な	0.13	0.63	-0.28	0.17	0.52
明るい	0.23	0.18	-0.72	0.08	0.61
快活な	0.29	0.10	-0.72	0.14	0.63

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
愛きょうのある	0.16	0.41	-0.57	-0.02	0.52
もの静かな	-0.21	0.43	0.61	-0.05	0.60
陰うつな	0.16	-0.28	-0.55	0.44	0.60
ユーモアのある	0.29	0.19	-0.58	-0.03	0.46
ふまじめな	-0.01	0.13	-0.01	0.55	0.32
不道德な	0.15	0.29	-0.00	0.57	0.43
心のせまい	0.21	0.11	-0.23	0.56	0.42
軽率な	0.07	0.17	0.11	0.62	0.43
怠慢な	0.07	0.22	0.09	0.59	0.41
おろかな	0.17	0.06	-0.00	0.71	0.53
従順な	-0.43	0.48	0.10	0.13	0.44
おおらかな	0.13	0.40	-0.14	0.17	0.22
たくましい	0.40	0.01	-0.34	0.05	0.28
地道な	0.07	0.47	0.17	0.19	0.29
精神的に強い	0.39	0.11	-0.02	0.16	0.19
力強い	0.41	-0.06	-0.37	-0.09	0.32
誰に対しても平等に 接することのできる	0.08	0.16	-0.14	0.30	0.14
協調性のない	-0.26	0.14	-0.23	0.46	0.36
正直な	0.10	0.23	-0.25	0.18	0.16
冒険心のある	0.45	0.10	-0.16	-0.24	0.30
画一的な	0.46	-0.05	-0.09	-0.01	0.23
理解を示す	0.04	0.43	-0.15	0.14	0.23
男らしい	0.36	-0.11	0.04	-0.23	0.19
つまらない	0.36	-0.08	-0.46	0.30	0.43
ちゃめっけのある	0.20	0.32	-0.42	-0.12	0.33
社会性のある	0.10	0.35	-0.32	0.29	0.31
子どもをかわいがる	0.03	0.34	-0.35	-0.03	0.24
やる気のある	0.40	0.42	-0.25	0.07	0.40
因子寄与率(%)	13.15	13.86	8.31	6.97	42.29

その内、男性性項目がほぼ集まった因子を男性性因子(14項目)、同じく女性性項目がほぼ集まった因子を女性性因子(16項目)とした。男性性因子・女性性因子の各因子は、表3に示す通りである。

表3 男性性因子・女性性因子

男性性因子	女性性因子
自立した	慎み深い
信念のある	母性のある
独立心のある	繊細な
自己主張できる	謙虚な
判断力のある	女らしい
指導力のある	人に気を使う
決断力のある	思いやりのある
勇敢な	誠実な
意志の強い	人に尽くす
明確な態度のとれる	しとやかな
積極的な	あたたかい
統率力のある	やさしい
行動力のある	人情味のある
頼りがいのある	素直な
	純粋な
	親切的な

そして、男性性因子、女性性因子のそれぞれの平均点を基準にして、心理的性度を次の4群に分けた。

- I群 男性的 (高 男性性、低 女性性)
- II群 両性的 (高 男性性、高 女性性)
- III群 無性的 (低 男性性、低 女性性)
- IV群 女性的 (低 男性性、高 女性性)

一方、人物画の指標としては、高橋らの指標を参考にし、

- ① 先に描く人物の性
- ② 男性像と女性像のサイズ
- ③ 性差を表現する段階
- ④ 女性像の衣服

の4指標について、それぞれ男女別、I~IV群の性度別に見ていく。

結 果

①先に描く人物の性

表4は、男女別に、男性像または女性像を先に描いた人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差が見られた ($\chi^2(1)=56.929, p<.001$)。よって、同

性像を先に描く頻度は男女とも高く、一方、異性像を先に描く頻度は、男性より女性の方が高いと言える。

表4 男女別の人数(カッコ内は%)

	男性像	女性像
男性	45(92)	4(8)
女性	25(26)	72(74)

表5は、I~IV群の性度別に、男性像または女性像を先に描いた人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差は見られなかった。したがって、性度別と男性像・女性像のどちらを先に描くかは関連性があるとは言えない。

表5 性度別の人数(カッコ内%)

	男性像	女性像
I群	15(58)	11(42)
II群	16(36)	29(64)
III群	23(52)	21(48)
IV群	16(52)	15(48)

② 男性像と女性像のサイズ

サイズについては、男性像>女性像、男性像=女性像、男性像<女性像の3つに分けた。

表6は、男女別に、3種類のサイズに分けた人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差は見られなかった。

表6 男女別の人数(カッコ内%)

	男>女	男=女	男<女
男性	24(49)	22(45)	3(6)
女性	32(33)	60(62)	5(5)

表7は、性度別に、同じく3種類のサイズに分けた人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差は見られなかった。

表7 性度別の人数(カッコ内%)

	男>女	男=女	男<女
I群	9(35)	16(61)	1(4)
II群	16(35)	26(58)	3(7)
III群	21(48)	20(45)	3(7)
IV群	10(32)	20(65)	1(3)

したがって、男女別・性度別ともに、男性像と女性像のサイズとの関連性があるとは言えない。

③ 性差を表現する段階

性差を表現する段階は、高橋・高橋（1991）を参考に次の第1段階から第5段階の5つに分けた。

第1段階 性差が不明

2つの人物画の間に明白な性差を示す特徴がなく、両方の人物がほとんど同じように描かれている。

第2段階 性差の特徴を1～2用いて、性差を少し表現している。

きわめてわずかの性差が認められる段階であり、その他の身体・衣服・姿勢の特徴がほとんど描かれていない。

第3段階 性差の特徴を数個用いて、性差をかなり表現している。

表情、体型、姿勢や衣服の特徴に違いがある段階である。しかし、次の第4・第5段階と異なり、男女の性差の特徴が明白だとは断定できない。

第4段階 性差の特徴を多く用いて、性差を明白に表現しているが、一方の人物像の性別がややあいまい。

他方の人物像のみを単独で見た場合、その性別がやや判断しにくい。

第5段階 性差が明白に表現されている。

男女の性差の特徴を明白に描いているばかりでなく、それぞれの人物画を単独に見ても、容易に判断できる。

表8は、男女別に、第1段階から第5段階に分けた人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差は見られなかった。

表8 男女別の人数（カッコ内％）

段階	1	2	3	4	5
男性	6(12)	16(33)	15(31)	3(6)	9(18)
女性	4(4)	27(28)	34(35)	13(13)	19(20)

表9は、性度別に、第1段階から第5段階に分けた人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差は見られなかった。

表9 性度別の人数（カッコ内％）

段階	1	2	3	4	5
I群	2(8)	11(42)	5(19)	2(8)	6(23)
II群	3(7)	11(24)	17(38)	5(11)	9(20)
III群	2(5)	15(34)	17(39)	5(11)	5(11)
IV群	3(10)	6(19)	10(32)	4(13)	8(26)

したがって、男女別・性度別ともに、性差を表現する段階との関連性があるとは言えない。

④ 女性像の衣服

これは性差を表現する段階を調べる上で、女性像にズボンを描いた絵が目立ったため調べることにした。分類は、スカート（ワンピース）、ズボン（ジーンズ・半ズボン）、裸、不明（スカートかズボンかわからない・服を着ているのかどうかかわからない、など）の4つに分けた。

表10は、男女別に、上記の女性像の衣服を4つに分けた人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差が見られた（ $\chi^2(3)=8.224, p<.05$ ）。女性像にズボンを描く頻度は、男性より女性の方がやや高い。

表10 男女別の人数（カッコ内％）

	スカート	ズボン	裸	不明
男性	26(53)	13(27)	5(10)	5(10)
女性	56(58)	34(35)	1(1)	6(6)

そこで、ズボンを描いた女性34人に関して、性差を表現する段階を調べた。その人数を集計したものが表11である。

表11 性差を表現する段階別の人数（カッコ内％）

段階	1	2	3	4	5
	2(6)	20(59)	9(26)	1(3)	2(6)

表11に示す通り、女性34人の内、約半数の者が性差段階で言う所の第2段階に属している。

表12は、性度別に、女性像の衣服の4指標について的人数を集計したものである。 χ^2 検定の結果、有為な差は見られなかった。

表12 性度別の人数（カッコ内％）

	スカート	ズボン	裸	不明
I群	11(42)	9(35)	2(8)	4(15)
II群	24(53)	15(34)	1(2)	5(11)
III群	24(55)	18(41)	2(4)	0(0)
IV群	23(74)	5(16)	1(3)	2(7)

考 察

今回の研究では、大学生の男女が男らしさ、あるいは女らしさをどのように受け入れているか、という性同一性が人物画テストでどう表れるかを、性度の観点から見てきたが、心理的性度から見た上で、人物画の違いは認められなかった。これには、いくつかの問題点が考えられる。まず、一つに、サンプリングの問題が挙げられる。本研究では、男性の被検者が女性の被検者の半分の人数しか調査できなかった。そのため、男性と女性の被検者を同じ人数で調査できたならば、違った結果が出ていた可能性も考えられる。人物画を検討していく指標として、男女別と心理的性度別の点から見てきたが、本来性同一性を受け入れ確立していく過程は、男女によって、異なるものと思われる。ある程度の被検者数を得た上で、心理的性度も男女別で考えていくことが、これから検討していく課題である。二つめには、被検者が大学生ということで、例えば女子大のような女らしさを奨励されるような環境に置かれている場合といった要因を考慮する必要があるだろう。

一方、男女別に人物画を見た場合、①先に描く人物の性の指標において、同性像を先に描く頻度は男女とも高いが、異性像を先に描く頻度は男性より女性の方が高いということがわかった。これは、高橋・高橋（1991）の結果とも一致しており、高橋らは、青年期の女性が異性像を先に描くのは、男性の被検者に比べて、それほど問題とならないと述べている。また、同じく高橋らは、異性像を先に描くことについて、次のように述べている。異性像を最初に描くのは、①青年や成人でも、重要な人物が異性である場合（異性の親への愛着や、恋人や配偶者への思慕や、異性の先輩や教師への関心など）、②異性全体への性的関心が強い場合、③異性への依存、④性の同一化や性的役割に混乱がある場合（異性に自分を同一化する同性愛のようなこともある）のことが多い。今回の研究が、高橋らとの研究と一致していることから、概して青年期の女性は、同じ青年期の男性よりも、異性への性的関心を示すことにそれほど抵抗がないのではな

いかと考えられる。

また、④女性像の衣服の描き方の点で、スカートを描く頻度は男女共に高いが、ズボンを描く頻度は、男性より女性に多いことがわかった。高橋らは、女性像にズボンを描くことについて、現代の世相の反映ともいえるが、一般に男女の性差への無関心さを示し、女性の被検者では、①男性への同一化、②男性的抗議を表したりする、と述べている。女性像にズボンを描いた女性の内、約半数の者が、第2段階・第3段階に集まっており、被検者が大学生ということから、男性への同一化や、異性への関心を表しているのではないか、ということが考えられる。

ところで、②男性像と女性像のサイズ、及び、③性差を表現する段階においては、男女間に差は見られなかった。②男性像と女性像のサイズでは、高橋らの結果と一致している。高橋らによれば、被検者の性別に関係なく、被検者の約半数の者は、男性像と女性像をほぼ同じサイズで描き、残りの半数についてみると、被検者の性別に関係なく男性像を女性像よりも大きく描く傾向がみられる、と述べ、さらにこの理由として、一般に女性より男性の方が体が大きいことと、現在のわが国が今なお男性優位の文化構造を持っていることが影響している可能性もあろう、と述べている。文化の影響がどれほど男性像と女性像のサイズに反映するかはわからないが、実際の男女の体の大きさの違いが人物画に表れていると考えてもよいと思われる。③性差を表現する段階においては、男女間で差は見られず、高橋らの結果と一致してはいるが、高橋らの研究では平均年齢23才で男女とも50%以上の者が第5段階の絵を描いているが、筆者の研究においては、平均年齢19才で、どの段階にも比較的バラつきがあることがわかる。筆者自身の描画の分類の仕方にも問題はあろうが、今後発達的な点を検討することが望まれる。

人物画テストは、本来は日常の臨床の中で、治療の流れやクライアントの心理状態を知るためのものである。そのため、人物画を施行する場合、クライアントとラポールを取った上で行ない、また描画している時の言動にも注意を払い、描画後の質問をすることで解釈を行なうことが大切である。そのような意味で、集団で実施した場合、緊張の無いだけ気楽に描けるという面もあるが、明らかに防衛的な描画がいくつか見られた。また、集団で実施したので、個々の被検者の言動にまで注意を払えず、時間の都合上描画後の質問も省くこととなった。だが、筆者の描画テストの研究はまだ始まったばかりであり、まずは健常な人々の心理状態を研究していくことで、臨

床事例と結びつけて考えられたらと思う。そのためには、筆者自身の人物画を見る目を養うことが今後のなによりの課題である。

最後に、人物画テストの施行にあたって注意を要したつもりであったが、筆者を写生したと思われる人物画が4枚あった。この点は、集団で実施した場合に注意する点であろう。

文 献

- 安達圭一朗・上地安昭・浅川潔司 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究（I）—日本版BSRI作成の試み，日本教育心理学会第27回総会，P484-485，1985
- Bem,S.L. The Measurement of Psychological Androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42. P155-162, 1974
- Buck,J.N. The H-T-P Technique. A Qualitative and Quantitative Scoring Manual. Journal of Clinical Psychology, Monograph Supplement No.5, Brandon, Vermont, 1948 加藤孝正・荻野恒一訳 HTP診断法，新曜社，1982
- Eng,H. The Psychology of Children's Drawing Routledge & Kegan Paul LTD, 1931 深田尚彦訳 児童の描画心理学，ナカニシヤ出版，1983
- Goodenough,F. Measurement of Intelligence by Drawings. N.Y.Harcourt, Brace & World, 1926
- Hammer,E.F. The Clinical Application of Projective Drawings, C.C.Thomas, Illinois, 1958
- 日比裕泰 人物描画法（D-A-P）—絵に見る知能と性格—，ナカニシヤ出版，1994
- 深田尚彦 人物画テスト，臨床描画研究I，金剛出版，P12-32，1986
- 市川緑 第4部心理アセスメント [20] 性度検査，心理

臨床大事典，培風館，P486-487，1992

稲浦康稔・柿坂緑 両性性（androgyny）と自己実現—男性性・女性性の二次元把握の試み，大阪市立大学生生活科学部紀要，28，P197-205，1980

井上知子 性役割の概念の測定について，追手門大学創立20周年記念論集，P17-27，1987

Machover,K. Personality Projection in the Drawing of the Human Figure, C.C.Thomas, Illinois, 1949

深田尚彦訳 人物画への性格投影，黎明書房，1974

町沢静夫 第VII章性と性格，臨床心理学体系第2巻パーソナリティ，金子書房，P211-225，1990

空井健三 人物画における男性像と女性像，臨床描画研究I，金剛出版，P33-49，1986

空井健三 第V章描画法第V-2章HTP・家族画，臨床心理学体系第6巻人格の理解②，P138-157，金子書房1992

多田建治 青年期における人物画描画法の研究…抑うつ性の観点から，日本教育心理学会第32回総会，P270，1990

多田建治 青年期における人物画描画法の研究…腕の位置と向性，協調性との関係，日本心理学会第55回大会，P570，1991

多田建治 青年期における人物画描画法の研究…外向性内向性の観点から，日本心理学会第57回大会，P78，1993

高橋雅春 HTPPテスト，臨床描画研究I，金剛出版P50-67，1986

高橋雅春・高橋依子 人物画テスト，文教書院，1991

山口素子 第5部精神医学 [35] 摂食異常（神経性食欲不振症，過食症），心理臨床大事典，培風館，P798-799，1992

山本真理子 性役割，児童心理学の進歩，金子書房，P137-165，1984

Summary

The purpose of this paper is to examine the difference of a man figure and a woman figure in the sex on the human figure drawings test. The subjects are the university students that have been established sexual identity. They are distinguished from four groups of masculinity, androgyny, femininity and undifferentiated on the sex role questionnaire, BSRI. And this study examines the difference of a man figure and a woman figure between these psychological sexual identity groups in the sex on the human figure drawings test.

The results are as follows:

1. In the sex of human figure that were drawn first by the subjects, the rates of drawing the same sex were high both men and women. But on the rates of drawing the opposite sex, women were higher than men.
2. Clothes of a woman figure differed from the trousers between men and women.
3. There was not a significant difference in the human figure from the masculinity-femininity point of view among four groups.

These results were discussed in relation to the identity and sexual interests toward men by women.